特　集

アジ研流
読書案内
―研究者が薦める3冊

開発を見直す三冊の本

野上 裕生

開発問題をやっている人たちの中には貧困に関心を持っている人が多い。しかし「貧困」とは何かを突き詰めて考える必要があるのではないか。そう考える人には次の三冊の本をお薦めしたい。

●河上肇（一九一七）『貧乏物語』（大内兵衛編集『河上肇』筑摩書房、現代日本思想体系一九、一九六四年、岩波文庫版一九四七（昭和二二）年・一九六五（昭和四〇）年改版）。

『貧乏物語』は河上肇が大正五年に大阪朝日新聞に断続的に連載したものを翌年に出版し、大きな反響を呼んだものである。河上肇は「驚くべきは現時の文明国における多数人の貧乏である」「英米独仏その他の諸邦、国は著しく富めるも、民ははなはだしく貧し」と言い、国の富と国民の生活が必ずしも同じでないことに切り込み、なぜ貧乏がなくならないのか、人間にふさわしい生活とはなにか、をわかりやすい言葉で説いていく。「一の二」から「一の三」までは最低生計費と「貧乏線」（今の用語では貧困ライン）の決定方法を解説し、その次は相対的貧困と絶対的貧困の概念を解説、その後では不平等研究では不可欠なローレンツ曲線を解説し、これだけ読んでも貧困・不平等研究の最小限の知識が得られる。後半はマルサスやアダムスミスといった主流派経済学への挑戦が展開されている。

河上肇のこの本は、当時の日本の貧困の現実から一度目を離して、「社会が解決しなくてはならない貧困とはなにか」「社会全体を変えなければ解決できない貧困とはなにか」を、河上肇自身が突き詰めて考えた思索の流れを物語ったものである。たとえば「貧困とは健康で文化的な最低限度の生活ができない状態である」といったとして、「健康」「文化的」「最低限度」の意味を明らかにするのはなかなか難しい。河上肇はいろいろな資料から「人間らしい生活」の内容を明らかにしようとし、その原因の中で、個人の選択と社会の条件がどのように関わっているかを論じている。その結果、貧乏はただ単に富の分配の不平等だけでなく、庶民が必要とする生活必需品の生産が進まないことからも来ていると考える。この視点には、消費需要一般ではなく、人間の基本的な必要を充たすことを訴えた「ベイシックニーズ」の思想も感じられる。

河上肇の政策提言は、結局は「富者の奢侈の廃止」というもので、この部分が後世の経済学者から河上の限界として指摘されることが多い。この意味では、本書は「貧乏」を克服する処方箋を提示しているものではない。たとえば貧困が政治経済システムに起因するものであるとしても、人が行動しなくては政治経済システムも変わらない。しかし、その人の考え方や行動そのものも政治経済システムの産物なのであり、結局、貧困問題は循環論法に陥ってしまう。河上肇は、この「循環」は現実の社会の変革の困難を反映したものだ、と述べるに止まっている。しかし、全体で一〇〇ページほどの本で貧困問題の核心をわかりやすい言葉で解説した河上の力量には関心させられる。この本の「序」で河上は「人はパンのみにて生くものにあらず、されどまたパンなくして人は生くものにあらずというが、この物語の全体を貫く著者の精神の一である」、「一部の経済学者は、いわゆる物質的文明の進歩―富の増殖―のみをもって文明の尺度となす傾きあれども、余はでき得るだけ多数の人が道を開くにいたることをもってのみ、真実の意味における文明の進歩と信ず

る」というが、この河上肇の言葉は、いまの開発協力の基本姿勢にも通じるものがある。

●エルンスト・フリードリッヒ・シューマッハー『スモール イズ ビューティフル 人間中心の経済学』講談社学術文庫、小島慶三・酒井懋訳、一九八六年。（原著、E. F. Schumacher [1973]*Small is Beautiful A Study of Economics as if People Mattered*, Muller, Bled & White LTD.）

近年「幸福」が盛んに研究されるようになり、「国民総幸福」を提唱するブータンも注目されている。ところでブータンは仏教が浸透した社会であると言われている（参考文献①）。そこで仏教という視点から開発戦略を見直す試みとしてシューマッハーの本を取り上げてみたい。シューマッハーは開発問題に関わっている人は唯物主義にとらわれて、カネで買える物的なもの、眼に見えるものばかりに注目してきたと批判する。なぜならば、「開発はモノから始まるのではない。人間とその教育、組織、規律から始まる」からである（二二一―二二二ページ、「第三部、第三世界、第一章　開発」）。そして、開発は大きな知的挑戦であり、「最良の援助は知識の援助であり、役に立つ知識を贈ることである」ことを強調している（二五七ページ）。また第四章は「仏教経済学」と題して、労働や天然資源、消費の問題を見直そうとしている。この章を読む中で、シューマッハーの着想が、ガンジーや仏教、イギリス石炭公社での勤務経験に基づくエネルギー供給の将来への不安、産業開発への疑問、貧困克服への努力、といった問題意識が融合して形成されたものであることが伺われる。またシューマッハーの思想には、昔の開発経済学に大きな影響を与えた「中間技術」といった考え方がたくさん含まれている。これは開発途上国に必要なものは「後背地である田舎で使われている素朴な手法より水準は高く、生産性も伝来の道具よりは高いけれども、西欧からとり入れた近代技術に比べるとはるかに簡単で資本も少ししか食わない」ということである（文献②三二八―三二七ページ）。

シューマッハーによれば、開発の基礎にある教育、組織、規律はゆっくりと進む深化の遅々たる過程であり、開発には「飛躍」はない。したがって、ミレニアム開発目標のように期限付きの目標達成や、GDPや人間開発指数、あるいは最近流行の「幸福感」や学力調査のランキングを競う最近の開発業界の潮流は、シューマッハーの指摘した視点を見落としているように思われる。シューマッハーの本を薦めたいのは、個々の提言以上に、競争社会の産物である現在の開発経済学とは違う思想を知って欲しかったからである。

●国連開発計画『人間開発報告書』（UNDP, *Human Development Report*, New York: UNDP Oxford University Press, Palgrave Macmillanから出版、日本語版は国際協力出版会、阪急コミュニケーションズ）

一冊の本というよりは、ほぼ毎年公刊されてきた国連の報告書であるが、どれか一冊でも読んで欲しいという意味で紹介したい。『人間開発報告書』をお薦めするのは二つの理由からである。ひとつ目は、この報告書が過去二〇年近くもの間、「人間開発」（人間の生活や権利を尊重した開発）という理念を維持してきたことである。二つ目は、この報告書は有名な割にはあまり読まれていないと思うからである。『人間開発報告書』が公刊されると、多くの場合、この報告書に掲載されている人間開発指数という統計指標（経済だけでなく社会の様々な側面を考慮した生活水準の良さの指標）で日本が世界の中で上位何位に入っているか、という点だけが強調されて報道されている。しかし、『人間開発報告書』はその時の開発の重要課題に関する現状分析といくつかの処方箋が提示されている。国連の報告書であるので、建前を述べているだけだ、という批判もあるかもしれないが、その建前を現実にする道を探るのが開発協力の専門家の仕事ではないだろうか。

（のがみ　ひろき／アジア経済研究所　開発研究センター［開発経済学］）

《参考文献》

①今枝由郎［二〇〇八］『ブータンに魅せられて』岩波新書一一二〇。
②バーバラ・ウッド［一九八九］（酒井懋訳）『わが父シューマッハー［その思想と生涯］』御茶の水書房。